



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

June 30, 2007, No. 22

【役員名簿 (2006-2008)】

代表: 生田省悟 (金沢大学)
 副代表: 高橋 勤 (九州大学)
 顧問: 秋山 健、上遠恵子
 事務局長: 結城正美 (金沢大学)
 事務局補佐: 小谷一明 (県立新潟女子短期大学)
 喜納育江 (琉球大学)
 会計: 高橋綾子 (長岡高専)
 辻 和彦 (福井大学)
 監事: 西村頼男 (阪南大学)
 ニュースレター編集委員:
 林直生 (滋賀大学)
 村上清敏 (金沢大学)
 山城 新 (琉球大学)
 会誌編集委員:
 太田雅孝 (大東文化大学)
 高橋昌子 (三重大学)
 パトリシア・ライオンズ (愛媛大学)
 野田研一 (立教大学)
 山里勝己 (琉球大学)
 コンピューターセンター:
 岩政伸治 (白百合女子大学)
 北国伸隆 (萩光塩学院)
 山城 新
 評議員:
 ブルース・アレン (順天堂大学)
 池田志郎 (熊本大学)
 石幡直樹 (東北大学)
 伊藤詔子 (広島大学)
 上岡克己 (高知大学)
 関口敬二 (大阪府立大学)
 高田賢一 (青山学院大学)
 巽 孝之 (慶応義塾大学)
 豊里真弓 (札幌大学)
 三浦笙子 (東京海洋大学)
 吉田美津 (松山大学)
 研究助成:
 稲本 正 (オークヴィレッジ)
 岡島成行 (日本環境フォーラム)
 木下 卓 (愛媛大学)
 生田省悟 (代表)
 高橋 勤 (副代表)

ASLE 日韓合同シンポジウム 2007 への誘い

代表 生田省悟 (金沢大学)

■少し詳細な地図で金沢市を眺めていただきたい。室生犀星が「美しき川は流れたり」と書いた犀川左岸をなぞってゆくと、市街地が途切れるあたりに野田山と呼ばれる丘陵地帯がある。アカマツとコナラが優勢なこの一帯は古くから墓地に供用され、前田利家をはじめとする歴代加賀藩主の墳墓、著名な人物の墓標、さらには文字通り風雪にさらされ判読不能と化した無数の墓がひしめいている。犀星が眠るのもこの場所だ。わがアパートから近いこともあって、おりにふれ訪れている野田山。雪解けに咲くオウレン、そしてギフチョウ(散歩の距離に、はじめてギフチョウの舞を目撃した感激は忘れられない)。梅雨時のむせかえるような緑と土の匂い、黄や赤や茶の落ち葉のころ、それにウサギなど小動物の足跡を辿るのも面白い雪の季節。今は消え失せてしまったが、ササユリやキンラン、あるいは国蝶オオムラサキなども季節に応じて目を楽しませてくれたものだ。

その野田山の西側、うっそうとした木立に囲まれて大乘寺はある。曹洞宗の名刹である。参道と山門の雰囲気には接するだけでも、荘厳というか厳粛というか、身も心も引き締まると同時に簡単には表現しようのない安らかさを味わうことができる。この大乘寺のご好意により、日韓合同シンポジウム最終日の夕刻、朗読会「ポエトリーリーディング in 大乘寺」を開催できるのは望外の幸せと言うより他ない。



蝉しぐれが降り注ぐなか、禅宗とのゆかりが深い高銀氏とゲーリー・スナイダー氏、このお二人による自作の朗読がどれほどの意義を帯びることになるのか。しかも金沢という地の禅寺で。それを思って、今から興奮状態に陥ってしまっている。

話が前後して恐縮だが、すでに何度も情報提供しているように、念願の「ASLE 日

韓合同シンポジウム 2007」がこの 8 月 19 日午後から 21 日にかけて金沢で開催される。「場所、自然、言葉—日韓環境文学の(いま)を考える」とのテーマのもと、両国 ASLE の相互理解と連携を深め、東アジアからの発信を強化する意図がこめられていることもまた、すでにご案内のとおりである。幸い、会員以外を含め、多くの方から研究発表のご応募をいただいたが、それらをどのように活かすのか。実行委員会のみならず日韓 ASLE 全会員の喜ばしい課題だと位置づけるようお願いする次第である。プログラムの具体的内容については事務局からの連絡に委ねるが、本シンポジウム開催にふさわしい企画として、会員でもおられる森崎和江氏に幕開けの基調講演と朗読をご快諾いただいたことは特筆したい。私たちが日韓のさまざまなを考える指針として、これほど適切な方がおられるだろうか。この点もまた、大いなる喜びとするところである。

また、本シンポジウムに対しては、多くの方々の支援と資金援助をいただいている。ロレックス・インスティテュートをはじめ、日本万国博覧会記念機構、トヨタ財団、日韓交流基金、石川県、金沢市からのご厚意には心から感謝申し上げたい。わたしたちの営為と目標とがこのような形で認知されたこと、その意味を改めて自覚しながら、シンポジウムを成功させ、成果を将来につなげてゆく責務をわたしたち自身が担っていることを強調したい。

今夏も酷暑が予想される。しかも 8 月下旬にさしかかり、何かとご多忙のことではあろうが、金沢市文化ホール(市内中心部)で、また大乗寺で新しい友人と接すること、みなさんと再会を果たせること、そして濃密な議論が重ねられるであろうことを心待ちにしている。■

ミシシッピの感星

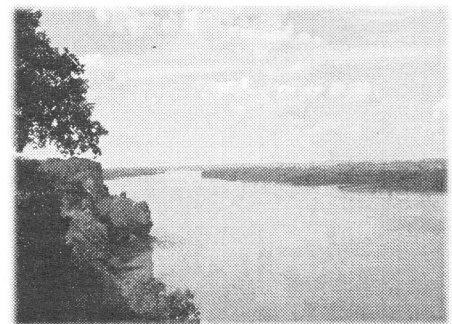
巽孝之 (慶應義塾大学)

■2006 年 10 月のなかば、14 日と 15 日の週末に行われた第 45 回日本アメリカ文学会全国大会が終わってすぐ、わたしはサウスイースト・ミズーリ州立大学で行われた「ウィリアム・フォークナーとマーク・トウェインをめぐる会議」(10 月 19 日-21 日)に向けて旅立った。畏友メアリ・ナイトンが企画立案し、自ら司会を務めるパネル「日本におけるフォークナーとトウェイン」のために、東京大学の林文代、立教大学の後藤和彦の諸氏とともに、出席したのである。正直なところ、ミズーリ州には大学時代の旅行で立ち寄った記憶しかなく、ジャズ都市セントルイスにはもういちど滞在したいと思わないでもなかったが、そこからシャトルで二時間近くもかかるケープ・ジラルドゥー(Cape Girardeau)なる町はまったく未知であり、当の大学がいくらフォークナー学者には垂涎の的である稀覯書アーカイヴがあり条件のいい研究員制度があると聞いても、いまひとつピンと来なかった。そもそも内陸なのにどうして「ケープ」を名乗るのか、ネーミングからして不可解きまわる。

だが、10 月 20 日(金曜日)の昼一番に行われた当のパネルが無事に終わり、せっかくのことだからと、大学が用意してくれた市内観光バスにパネリスト全員でいざ乗り込んだあとには、わたしの印象はまるっきり変わってしまった。まずミシシッピ河岸を守る堅固な堤防と、そこにそびえる巨大で長大な「ミズーリ州栄誉の殿堂壁画」“Missouri Wall of Fame”がすばらしい。そこに多少サイケなタッチで描かれているのは、ミシシッピ河畔の歴史であり、そしてケイト・ショパンから T・S・エリオット、テネシー・ウィリアムズ、ハリー・トゥルーマンにいたるミズーリゆかりの著名人たちの肖像画の一群である。

さらに驚いたのは、壁をくぐり堤防まで出てみて接したときのミシシッピ河が、抵抗力に満ちた流れ方をしてきたことだ。上流から下流へまっすぐ流れるのではなく、ところどころ細かい渦が旋回しながら、船舶の運航を阻んでいるかのようにすら見える。水深が浅く川筋が定まらず、川底すらたえず移動しているという特殊な自然条件が、作用しているのかもしれない。そしてこのとき、わたしは初めて実感した—これは河というより海ではないか、ということ。

もちろん、いやしくも数十年間、アメリカ文学を専攻しながら、ミシシッピ河の本質すらいまになって目撃するというのは、まことにお恥ずかしい限りであり、笑止千万であろう。いや、この河を見たこ



[写真 Cape Girardeau Convention and Visitors Bureau Photo より]

とがなかった、というわけではない。個人的にはニュー・オーリンズが好きで、観光と会議とを問わず何度も訪問してきたのだから、蒸気船ナッチェス号やトウェイン号に乗り込んだときに、かのチャールズ・ディケンズが評した「溝泥の河」をきちんと見ていたつもりだった。しかし世の中には、よく見ていたつもりでぜんぜん見ていない、ということが往々にして起こりうる。この時点までまったく関心を払っていなかった町の成り立ちについても、同地に住む大学関係者から教えてもらって、ようやく腑に落ちた。奇妙な町名は、フランスの兵士にして交易所建設に功のあったジャン・バティスト・ド・ジラルドにあやかって1733年に付けられたものであり、「岬」(ケープ)とは、ミシシッピ河を眺望する岸壁を指していたのが、のちに鉄道建設で崩されてしまったという。げんに、ケープ・ジラルドゥーはアメリカ内陸で唯一「岬」を名乗る場所だから、その命名は確信犯だ。そして、そう命名したくなる気持ちは、まさにこの町を流れるミシシッピ河が優雅な河川というより獐猛なる大海にほかならないことを考えると、十二分に了解されるのである。

そしてこのときわたしは、パネルでは言及すらしなかったフォークナー作品のことを、たちまち思い出していた。当初は失敗作ともいわれた1939年発表の『野生の棕櫚』*The Wild Palms*が、それだ。この作品は「野生の棕櫚」というタイトルで綴られる、医学生ハリ・ウィルボーンと人妻シャーロット・リッテンメイヤーの不倫物語と、「オールド・マン」というタイトルで綴られる、刑務所の囚人の逃走物語とが交互に進行する実験的な「二重小説」(ダブル・ノヴェル)。そしてとりわけ「オールド・マン」の物語は、1927年のミシシッピ河すなわち「オールド・マン・リヴァー」の大洪水を、あたかも海洋冒険物語のごとくに描く。

歴史をふりかえると、1926年の夏の終わりにアメリカ中西部を襲った暴風雨の影響が中西部の河の水位を引き上げ、翌年27年が明けるとすぐ、例年にない大雨とそれにつづく嵐が波状的に襲いかかり、ミシシッピ河であふれた水がオハイオ河へ逆流するという異常事態が起こっている。やがて4月にはミズーリ州を皮切りに堤防が崩壊し、大洪水で何千頭もの家畜と数百人もの命が奪われ、これはアメリカ合衆国史上最大の自然災害となった(ジェームス・M・バーダマン『ミシシッピ=アメリカを生んだ大河』講談社選書メチエ、2005年)。かくしてフォークナーは、「オールド・マン」のなかで、水難者対策のために駆り出された囚人がひとりの妊婦と知り合い、ふたりで逃避行を続けていくうちに、彼女が子供を出産するという物語を展開した。

ここで興味深いのは1973年、『野生の棕櫚』が、ふたりの日本作家の手になる代表的長篇小説に影を落としていることである。ひとつはカトリック作家・遠藤周作の『死海のほとり』。この点については、すでに中野記偉氏の『逆説と影響』(笠間書院、1979年)に詳細な比較文学的分析があるので、多くは述べない。もうひとつはSF作家・小松左京の400万部を超える大ベストセラー『日本沈没』であり、こちらとの関連をめぐる探究は皆無であった。

197×年、太平洋プレート下のマントル対流相に異変が生じ、日本列島全体が海中へ飲み込まれ地球上から消滅するというパニックと、それによって生じる科学的・政治的・経済的・民族的な影響を多角的に描き出したこの第一級エンタテインメント『日本沈没』は一大ブームを巻き起こし、1970年代半ばという時代、すなわち米ソ冷戦の渦中でオイル・ショックを迎えた時代における高度成長期日本の危機意識と、世界雄飛をめざす国際化指向の証言として、多くの人々の共感を呼ぶ。ただし、それから33年を経て、2006年にリメイクされた映画版が再びヒットを記録したのは、まずまちがいでなく、21世紀を迎えて地球温暖化の警鐘が鳴り、ツバルやバングラ・デシュなど水没の危機が絵空事ではない国家が実在するという、別のコンテクストを得たためだろう。アメリカを代表する主流文学作家がもたらした『野生の棕櫚』をパニック冒険小説と捉え直し、日本を代表する大衆作家が生み落とした『日本沈没』をエコロジー批評的小説として読み直す作業は、決して無駄ではあるまい。その先には、伝統的な比較文学というよりも、はるかに広い空間、はるかに深い時間をふまえた惑星規模の視座を据えて初めて可能になる世界文学研究の可能性がひそむ。

しかも、この方向で思索するための基礎は、じつはいまや充分整っているのだ。ポストコロニアリズム以後の文学批評に限っても、コロンビア大学教授ガヤトリ・スピヴァックが『ある学問の死』*Death of a Discipline* (New York: Columbia UP, 2003)において提唱した「惑星的思考」をさらに発展させるかたちで、最近ではイェール大学教授ワイ・チャー・ディモクが刺激的な著作『交錯する諸大陸—アメリカ文学に流れる深い時間』*Through Other Continents: American Literature across Deep Time* (Princeton: Princeton UP, 2006)を世に問い、さらに彼女はハーヴァード大学教授ロレンス・ビュエルとの共編著『惑星の影—世界文学としてのアメリカ文学』*Shades of the Planet: American Literature as World Literature* (Princeton: Princeton UP, 2007)をまとめている。また、文化人類学の領域でも、コロンビア大学教授ゲイリー・オキヒロが、昨年2006年11月25-26日の琉球大学国際会議「アメリカ合衆国と太平洋の島々—文化、科学、政治」における講演「島で見る世界」

“Island World” (2006)で明かしたとおり、プレートテクトニクス理論はアジアとヨーロッパの区分を危うくするばかりか、オーストラリアがインドの部分成し、日本がハワイと同じプレートに載っているという発想から、西欧近代的な大陸中心の考え方ではなく、島々から成り立つ海中心の考え方を立ち上げることすら可能にする。

文学研究のプレートが、再び変動し始めた。近い将来、アメリカ文学史が長く慣れ親しんだミシシッピ河もまた、惑星的思想の主題として新たな生命を得ていくだろう。■

Self-Ethnographic Note :

台湾国際学会にヨソ者として参加して

森田系太郎 (立教大学大学院)

■2006年11月16日@成田空港。17:55 発の UA881 便に乗り込んだボクは、半年ぶりの海外にワクワクしていた。目的は台湾で開かれる国際学会への参加である。海外では、何と言っても、日常から解放されてヨソ者 stranger になれるのがいい。異邦人、エトランゼ étranger、またはガイジンでもいい。ヨソ者として扱われ、ヨソ者としてその国を見る。“I’m a stranger here”。「不案内なもので」、「よそ者なので分かりません」と言える自由。そして新しい視点を得たボクは、その視点を持って自分を、日本を再定位できる。

21:05@蒋介石空港。台湾の歴史をすべて背負ったような名前の空港に定刻どおりに到着すると、現地の学生がお出迎え。今回の国際学会への応募を勧めてください、立教大学異文化コミュニケーション研究科の集中講義でも環境文学の教鞭をとられている金沢大学の結城先生夫妻と合流し、タクシーで台北市内中心部に向かう。宿泊施設は Howard International House という会議場が併設されたホテルで、豪華な割には一泊約 2,000 台湾ドル (8,000 円弱) と安価。しかしこれはボクが持つジャパンマネーが可能にしていることであり、日本と台湾には歴然とした経済格差が存在する。

学会は 11 月 17 日の午後から 2 日間に渡って国立台北科技大学にて開催された。この大学は 1912 年に設立され、終戦までは日本人が学長を務めていたというコロニアルの産物。その校舎の間を苦々しい思いで通り抜け、敷地の奥にある建物で受付する。当学会の正式名称は “Sustainability and the Literary Imagination: Transdisciplinary and Intercultural Perspectives” で、今回が第 1 回目の開催となる。基調講演はエコクリティシズムの分野で若手をリードする Greg Garrard 氏とスタンフォード大学の Ursula Heise 氏。この 2 人の講演を中心に、英米文学・環境文学研究者を中心として、2 日間合わせて台湾

内外からの 14 のプレゼンテーションが行われた。

結城先生のご発表は 2 日目の第 4 セッションで、タイトルは “Nurturing the Sense of Real Place: Poetics and Politics of Story”。バリー・ロペス (編) の最新作 *Home Ground: Language for an American Landscape* が、持続可能な未来にとっての必要な言語を見つけるための文学的試みの好例である、という結びであった。Q&A セッションでの Heise 氏からの story/narrative に関する質疑とそれに対する先生の応答は興味深いものであった。

森田の発表は 2 日目の最後のセッション。国際学会でのプレゼンテーションは初めての経験で、民俗学風に言えばハレ=非日常の舞台である。テーマは “Global Warming and Gender” でタイトルは “Engendering Global Warming With an Ecofeminist Perspective”。文学ではなく社会学のディシプリンに属する発表であったため参加者からのコメントは少なかったが、Q&A での「生産/再生産の二項対立が可能か」という 이슈をめぐる Garrard 氏とのやりとりは、今後の糧となるものだった。

東京に帰りヨソ者から常民へと戻った今、今回の国際学会への参加を振り返ってみると、それが自分に与えた刺激は大きなものであることに気付く。恐らくその理由は、英語という不自由な自前の言語ではないコトバでの発表に加え、日本のアカデミアでは取り上げられていないトピック・文献等に多く触れる機会があったからだと思う。逆に言えば、自前の日本語であったのならできたのであろう Q&A での切り返しや微妙な言葉のニュアンスの表現ができなかった。今年 8 月に金沢で開催される ASLE 日韓シンポでは、国際 inter-national 学会にもかかわらず日本語で発表させて頂けるとのことで、今はその有り難さが一層大きく感じられる。

落胆させられたのは、アジアで開催された学会であるにもかかわらず、基調講演の 2 人も欧米系、Q&A セッションを独占するのも欧米系、とういコロニアルな状況だ。言語の壁を差し引いても「透明で中立な学会」などはありえない。そして植民地、歴史、人種、ジェンダーという様々な変数が蠢く場で否応がなくポジションナリティ positionality を問われる自分も、もはやヨソ者ではいられなかった。

今回の台湾学会の半月前にこの世を去った、高名な人

類学者クリフォード・ギアーツ Clifford Geertz は、80年代に(文化)相対主義、そして相対主義に対するアンチテーゼであった反相対主義に対し反=反相対主義を打ちたてた。そして“If we wanted home truths, we should have stayed at home.”(自文化についての明白な事実だけを得たいのならば、自文化に留まっていればよかったのだ。**)と喝破した。ボクは今振り返ってみて、ギアーツの言うように、台湾へ向かって舟を漕ぎ出してみてよかったと思っている。

*Geertz(1984, p. 278)。

**邦訳文献では「故郷の真理を失いたくないのなら、はじめから故郷にとどまっていればよかったのです。」という訳になっている(ギアーツ, 2002, p. 94)。

参考文献

Geertz, C. (1984). Distinguished lecture: Anti anti-relativism. *American Anthropologist*, 86(2), 263-278.
ギアーツ, C. (2002)「反=反相対主義—米国人類学会特別講演」小泉潤二(編訳)『解釈人類学と反=反相対主義』(59-94頁). みすず書房。

風景とアイデンティティ～サンフランシスコでの講演

喜納育江(琉球大学)

■今年3月、ベイエリアにある北カリフォルニア日本文化コミュニティセンター(JCCNC: Japanese Culture and Community Center of Northern California)から沖縄の話をするように依頼された。JCCNCはサンフランシスコのジャパントウンの中にある日系人の団体で、後世に日本文化を伝えるべく講演や講習会などを主催している。ジャパントウンといえば、アメリカ社会におけるオリエンタリズムを象徴する場所という印象が強かったが、最近では寿司屋や和風の小物店などが軒を並べる一方、沖縄特産品店も出現し、沖縄ブームも太平洋を越えて存在しているところを見ると、あながち日本社会の変化に取り残されたままというわけでもなさそうだった。また、ジャパントウンの界限には日本語をしのぐ勢いで、ハングル文字の看板と共に韓国人経営の店も増殖していた。

ジャパントウンがかつての「エキゾチックな」雰囲気や活気を失ったのは、カリフォルニアの日系人が、ベイエリアではもはや突出した存在ではなくなって、風景に馴染んでしまったからだろうか。黒い直毛をポニーテールにした化粧っ気もない20代とおぼしき若い日系女性が、煙草を吸いながら携帯電話で話している。聴こえてきたのは、アクセントもない典型的なアメリカの若者英語だった。

どんな人たちが何人ぐらい講演に来てくれるのかなど、全く知らされないまま会場へ。演題は「沖縄人であるということはどういうことか(What it Means to be Okinawan)」である。北米毎日新聞や日米タイムズなど、地元紙の宣伝効果もあり、50名ぐらいの聴衆が集っていた。移民の方もいれば、日本語が話せない若い2世や3世の方もいた。

反応も予想できない聴衆の前で、私は語り始めた。外部からのイメージとしての沖縄に、自分自身の「生活者」としての日常の物語を「込めて」いった。沖縄の地理的位置、祖母や母から聞いた沖縄戦の話、在沖米軍基地と住民の抵抗運動の現在、家族でお墓に集まってご馳走を食べる清明祭、ウチナーグチ(沖縄方言)と日本語の差異など。沖縄の人なら誰でも知っている「ていんさぐぬ花(鳳仙花)」というウチナーグチの歌も、英訳した歌詞と共に聴いてもらった。「鳳仙花の花びら(から出る色)は、爪先に染めて、親の言うことは肝(心)に染めなさい」という、親子の絆を歌った歌である。散歩道に咲いていた鳳仙花の花びらを祖母が摘んで、それから採った赤い汁で爪を染めてくれた思い出話などをした。歌を聴きながら涙している人が何人もいた。後で聞いてみると聴衆の半分以上が沖縄系の人だった。

物語から想起される故郷の風景。あの日の会場は、故郷を離れてカリフォルニアという新しい場所で人生を営んできた人々の望郷の念で満ちていたと思う。私も5年ほど沖縄を離れてアメリカに留学していたから故郷を想う気持ちには共感できる。が、20年も30年も離れて暮らしてきた人々、ましてや親の物語を通してしか故郷を想像するしかない若い人々の望郷

の念とはどのようなものなのだろうか。

日系アメリカ人作家のカレン・テイ・ヤマシタは「郷愁」を意味するポルトガル語「サウダージ(saudade)」について、「サウダージはひとの記憶と共に旅をする」と語る。新しい場所で層を重ねるサウダージ。それはある場所に集う人々のサウダージが、その場所を変容させていく可能性も暗示している。故郷の風景や環境に育てられたサウダージが、場所を変えてもなお人の記憶の中に生き続け、新しい場所の創造に加担する。アメリカ文化の多様性には「場所の文化」の多様性も含まれているのかもしれない。

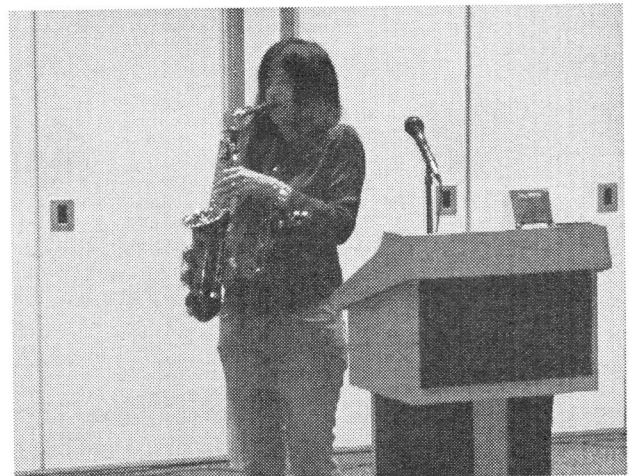
そんなことを考えながら、ジャパントウンの中心に建つちよつと見慣れない姿の五重塔を眺めていた。■

ジョイ・ハーゾの世界に触れて

茅野佳子 (明星大学/現在ニューメキシコ大学客員研究員)

■2006年秋、アルバカーキにあるニューメキシコ大学で、ジョイ・ハーゾの担当する授業を聴講した。ハーゾは2005年の秋に母校ニューメキシコ大学英文科の教授となり、秋学期はMFA (Master of Fine Arts)プログラムでクリエイティブ・ライティングを専攻する学生向けの授業を担当し、春学期と夏はハワイに住んで詩人・アーティスト・ミュージシャンとしての活動を続けている。聴講したのは“From Creation Stories to the Hip Hop Nation, Native Literary Forms”というコースで、口承文学、物語、短編・長編小説、詩、歌、映画等、様々なジャンルの作品が取り上げられ、活発なディスカッションが行われた。「様々なジャンル」と書いたが、「ジャンル」という言葉で作品を分ける難しさを認識することの連続だった。10月中旬に始まり、週に1回5時間半の授業が8回という集中授業だったが、毎回盛りだくさんの内容で、あっという間に時間が過ぎていった。授業の途中で輪になってサークル・ダンスを踊ったり、先住民の作家や写真家、ストーリーテラーを招くこともあった。最後の授業は、ハーゾのドラマと歌で締めくくられた。

11月中旬に、ニューメキシコ大学ギャラップ・キャンパス(アルバカーキから西に約130マイル)でハーゾの詩の朗読会があった。ハーゾとサイモン・オーティーズの娘レイニー・ドーン(Rainy Dawn)も特別参加し、詩を披露した。会場には静かに2人を見守るオーティーズの姿も見られた。ハーゾは朗読の途中に歌やサクソフーンやドラムの演奏をごく自然に挿入し、全体がひとつながりのパフォーマンスになっていて、音と言葉、詩と歌といったカテゴリーの境界線が崩されていた。この日紹介されたコラム(10月のムスコギー・ネイション新聞に掲載されたもの)が、ハーゾの雰囲気と人柄をよく伝えていて、内容も印象的だったので、後で頼んでコピーをもらっておいた。その全文を拙訳で紹介したいと思う。(紙面の関係で原文を合わせて載せてもらうことは難しいので、原文を読みたい方にはメール添付でお送りします。茅野までご連絡ください。ykayano@aol.com)



(以下、ジョイ・ハーゾのコラム)

先週アルバカーキ北西部の水路沿いの道を散歩していたときのことである。そこは土がむき出しになっていた。夏の間に両岸に生い茂っていた背丈の高い雑草も花もすっかり刈り取られてしまっていたのである。水の流れはほとんどなく、底には泥がたまっているか、ところどころに水たまりができていただけだった。柔らかい泥を探しているザリガニや、緑色の蛙の頭があちこちに見え隠れしていた。この機会に日光浴をしている蛙もいたが、人や犬の気配がすると皆慌てて泥の中にもぐり

こんだ。その中に物怖じしない賢そうな蛙がいた。その蛙は水路のへのコンクリートの上にすわり日光浴をしていた。この蛙から何か学べるのではないかと期待して、私もしばらくそこに腰を下ろした。最近蛙も珍しくなってしまった。有毒物質や殺虫剤のために姿を消してしまったのだ。これだけ多くの蛙をひとつの場所で見るとは何年かぶりのことだった。蛙も私も黙ったまま、秋の青空が流れていくのや、ザリガニがもそもそ這い回っているのを眺めていた。頭の奥では、机の上にたまっている学生のレポートや雑事、アメリカ政府のテロリスト攻撃のことや弟の心臓のことが気になっていた。ペースの速い生活からくる緊張感がゆっくりとほどけていった。ついに賢い蛙が口を開いた。昔は人間がよく遊びに来たものだよ。蛙も人間を訪ねたものだ。昔を思い出しながら座っていると、青空がまた通り過ぎ、雲が広がりそうな様子だった。世界が進歩を続ける中で大切なものが失われていく現状を、私たちは悲しく思った。人間はどこかで混乱し道を見失ってしまった。覚えている人もいけど、と今度は私が言った。旅の先々で私はそういう人を探すことにしている。蛙はうなづいた。昔を忘れてしまった蛙もいる。時が蛙と人間を引き離してしまったんだね。なんとかやっていくしかない。私たちはまた会うことにして、こうして会えたことに感謝して別れた。振り返ると蛙はまだそこにいて、ザリガニを泥のたまったところへ行かせてあげようとしていた。



今月のニュースの中に、同性愛の羊の治療法を見つけようとしている科学者の話があった。科学者たちは羊に過剰なエストロゲンを投与し、その傾向を抑えることができるかどうか実験中なのだそうだが、私にはこっけいに思える。羊がではなく、科学者がである。この研究にかかる費用を使えば、おそらく老人用住宅を1ブロック分以上建てられることだろう。憎悪や非難の治療法でも考えたらいいいのに。お互いを尊重するようになれば、今よりずっとうまく暮らしていけるだろう。賢者は人を肌の色や財産や生まれつきの性質で判断したりしないものだ。重要なのは、お互いを(人であろうと蛙であろうと)どのように見るか、それぞれのもつ才能をどうのばしていくか、

ということである。蛙の親分 (Mekko Frog) だったら何と言うだろう。おそらく科学の名の下に過剰なエストロゲンを投与されて跳ね回るあわれな羊のことを笑うことだろう。

オクラホマ州ノーマンで出版されている『世界文学の今日』の最新号にチェロ奏者のヨーヨー・マとミシェル・ジョンソンのインタビュー記事があり、その中でヨーヨー・マがシルク・ロードについて言っていたことがきっかけで、ムスコギーの文化の発展について考えることになった。

「何年も前に日本に行ったとき、ある賢者が私に言った。ローカルだと考えられているものを、音楽でも、思想でも、伝統でも、仕事でも、何でもいいから深く見つめてみると、実はそれがグローバルなルーツをもっていることに気づくものだ。太古の人々は孤立して暮らしていたと考えられがちだが、そこには(シルクロードという)交易の道があって、宗教も音楽も楽器も食べ物も商品も、あらゆるものが移動していた。もちろん人も一緒に移動し、人も物も思想もあらゆるものがお互いに大きな影響を与え合っていたのだ、と。」

私は、ミシシッピ河やペルシア湾岸、大西洋やカリブ海を、ムスコギー族の交易ルートを結ぶネットワークの一部と考えている。今やこのルートは航空路によってさらに拡大されている。ムスコギー文化として知られるようになったものについて思いをめぐらしてみると、私たちの文化は多くの糸で世界中につながっていることに気づく。毎日サクソフオンを練習するときに、私はアドルフ・サククスに向かって“mvto”(クreek語の「ありがとう」と言う。彼はベルギー生まれ、生涯の大半をパリで過ごし、そこで自社製のサククスを宣伝し広めることに努めた。サクソフオンを発明したことで、その成功を嫉妬する同業者から非難中傷されることになった。サククスはやがて大西洋を渡り、ジャズをはじめアメリカ音楽に欠かせない楽器となった。クreek・インディアンが愛する楽器のひとつでもある。ジム・ペッパーは今でもジャズ界に君臨するサククスの王者である。トーマス・ベリーヒルのことも思い出す。他のサククス奏者のことも知りたいと思う。私の父方の祖母ナオミ・ハージョもインディアン・テリトリー(オクラホマ州のインディアン特別保護区)でサククスを演奏していたのだ。そのうちサククスはムスコギーの伝統楽器とみなされるようになるかもしれない。そんなものだろう。誰にもわからないことだ。■

現代ネイチャーライターの横顔 (7)

中国籍モンゴル人作家マンドムイ (満都麦) の挑戦

田淵人司 (私立通信制・信濃むつみ高等学校)

■遊牧文明は世界で最も地球にやさしい文明であった—といった荒唐無稽に聞こえるかもしれないが、モンゴル研究の分野では近年、「遊牧文明の見直し」が熱い視線を持って迎えられている。近代化が急速に進展する時代には、粗放的かつ生産性が低いという烙印を押され続け、前時代の遺物としてすら扱われてきた「遊牧」という生業は、農耕そして定住へとという時代の趨勢の中でつねに後退戦を強いられてきた。ところがその近代化が環境破壊へ、沙漠化へと進み、黄砂がしばしば海を越え日本へも渡ってくる今日に及んで、チンギス・ハーンの時代からつい最近まで、豊かな草原に抱かれるように自然と共存し生計を営んできたモンゴル人の遊牧という叡智が再評価されたのだ。持続可能でオルタナティブな社会モデルの構築が喫緊の課題である私たちにとって、これは自然ななりゆきだったのかもしれない。

しかし、一見牧歌的なモンゴルの草原には、手つかずの自然はそう残されてはいない。また、中国・内モンゴル自治区は漢民族の人口の方が圧倒的に多く、モンゴル人の中にも牧畜を離れ、農業に従事する人たちもいる。そこで当然、環境に向かうまなざしも、民族文化やライフスタイルといったその他の要素と密接に絡み合い一筋縄ではいかない。まるで、簡単には後戻りできない文明の迷宮に迷いこんだかのようだ。

そんな中、モンゴル人の伝統的な生活世界を作品の舞台とし、そこで近代人のエゴや自然の荒廃、動物と人間との関係といったさまざまな現代的要素を鋭く対峙させることによって、環境について深く考えさせてくれる珠玉の短篇を書く作家がいる。マンドムイ(満都麦)である。1947年7月、内モンゴルの赤峰市に生まれた彼は、その後の若かりし頃をドゥルベドの美しい草原地帯で過ごし、モンゴルの伝統的な牧畜文化に慣れ親しむことができた。文化大革命のさなかには冤罪で投獄されたこともあるが、1976年に釈放、その後は教育や文化に携わる仕事を経験してきた。創作活動は1973年の詩や1974年の処女小説の発表を皮切りに開始するが、当初はリアリズム作品から出発したという。

転機となるのは1980年代中盤からで、象徴・意識の流れ・暗示といった西洋文学の手法を積極的に取り入れつつ、ストーリー性重視の作風から、主人公の心情の吐露や主観的感情を重視した作品を書くようになり、現在では「型にはまらない作家」との定評を得るまでになった。

彼の作品の特徴は、環境破壊をことさらに取り上げて書き立てるのではなく、それらが主人公の生活世界にじわじわと迫りくる背景として描かれる点にある。その一方、狼、馬、ガゼル(ウシ科の野生動物、中国語で「黄羊」)などといった草原の動物たちが作品に登場し、主人公である人間との関係性を通じて、人間のエゴや罪深さ、人間存在のあるべき姿などがあぶり出されるようになっている。

たとえば『草原の奥地で』の主人公ナジドは、颯爽と馬を乗りこなすことのできる勇敢で男らしいモンゴル青年である。その逞しい好青年ぶりは地元でも評判になっていた。ところがある日、馬が穴にはまって落馬、ナジドは足を骨折して草原の奥地に独り取り残されてしまう。折しもその日は、密かに心を寄せるオリハンという娘に頼まれ、テレビを取りつけてあげる約束をしていた。激痛をこらえながらも、自分の今の惨めさに耐えられないナジドは、這いつくばってでもオリハンのもとへ駆けつけようとする。

しばらくすると目の前に、一頭のガゼルが現れる。ナジドと同じように後脚を引きずって進むガゼルを見たナジドは、あたかも自分がからかわれているように感じるが、よく見るとそのガゼルは猟銃で後脚を撃たれていた。動物が減り、なかなか狩りの獲物が見つからないという状況下、ナジドはガゼルを自分の獲物にしたいという強い衝動に駆られ、お互い這った状態での競争がはじまる。距離をつめ、いよいよガゼルを捕らえようとしたそのとき、あまりに恐れおののくガゼルを不思議に思い、後ろを振り返るとお腹をすかせた狼が近づいてきていた。

たった今までガゼルに対して圧倒的な強さを誇っていたナジドは、自分が狼の射程圏内に入ったことによって、目の前の

ガゼルとまったく同じように無力で弱い自分に気づく。そして、もし狼に自分が食べられてしまったら、勇敢さで名を馳せた自分が、地元の人々やオリハンにどのように思われるかを考えると、いてもたってもいられない。そして、もし自分がガゼルに夢中にならず冷静だったら、あるいは普段のように立ち上がることができ狼に自分の威厳を示すことができたら、と思いをめぐらせていく。

このようにマンドムイはこの作品で、生態系の弱肉強食ピラミッドにおける弱者の象徴としてのガゼルと、強者の象徴としての狼を対峙させた。そして人間を頂点に立たせるのではなく、この2者の中間に位置させることで、自然界の中で、強くもあり弱くもある人間存在の特異性を見事に描きだしたのである。

マンドムイは一貫してモンゴル語で創作しており、同じモンゴル人ながら中国語で書く郭雪波などと対照的である。もともと中国語に翻訳・出版された作品も多数あるため、馬明奎ら中国国内の研究者にも注目されるなど、幅広い読者層を持っているようである。また、モンゴル国ウランバートルでも作品集が出版されており、広範囲に活躍している。■

大阪大学環境文学フォーラムの報告

伊藤詔子（松山大学）

■2007年3月17日（土、10:30-17:30）、大阪大学豊中キャンパス 文学部第1会議室で、日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト領域 V「文学・芸術の社会的媒介機能」、芸術とコミュニケーションに関する実践的研究「環境と文学」部門 第3回フォーラムが下記のプログラムで開かれた。英米独仏そして日本文学を一堂に集めたユニークな環境文学研究会で、前半の講演と、後半の院生の発表6本があり、盛会であった。

あいさつ「環境と文学」部門代表 玉井 暉
（大阪大学教授、英文学）

10:40 講演の部

1. 林 正則（大阪大学教授、ドイツ文学）
「ことば・身体・自然—〈環境文学〉の視点から見たゲーテ」
司会： 玉井 暉（大阪大学教授、英文学）
2. 伊藤詔子（広島大学名誉教授・
松山大学教授、アメリカ文学）
「ポスト・サイレントスプリングと第二波エコクリティシズム」
司会： 片淵悦久（大阪大学助教授、アメリカ文学）

14:00

3. 川端康雄（日本女子大学教授、英文学・
イギリス美術史）
「ラスキン・モリス・エコロジー」
司会： 玉井 暉（大阪大学教授、英文学）

15:00 研究発表の部

1. 協 聡（大阪大学大学院博士後期課程、
フランス文学）
「パリの遊歩者、ヴァロアの散策者—ネルヴァル後期作品における散策の諸相」
司会： 和田章男（大阪大学教授、フランス文学）
2. アブドエルマクスード・オラビ・ワーイル
（大阪大学大学院博士後期課程、日本文学）
「梶井基次郎「城のある町にて」を中心に」
司会： 鈴木暁世（大阪大学助手、比較文学）
3. 出口 馨（大阪大学大学院博士後期課程、比較文学）
「創作環境としての〈水〉の問題—白秋とその周辺」
司会： 内藤 高（大阪大学教授、比較文学） ■

「みどりの式典」に参加して

岩政伸治（白百合女子大学）

■去る4月、内閣府より文学・環境学会宛に「みどりの式典」への参加依頼があり、平成19年4月27日、役員を代表してこの式典へ参加した。「みどりの式典」とは平成18年8月8日の政府閣議で、「みどり」についての国民の造詣を深めるため、「みどりの月間」と「みどりの学術賞」を創設することが決まり、「みどりの学術賞」を授与する場として設定された式典である。

突然の参加依頼であったが、参加することで文学・環境学会への何らかのメリットが考えられると判断し、私自身が当日、式典が実施される憲政会館の近くで所用があったために参加の申し入れをお願いした。

結論から申し上げれば、内閣府が「みどりの学術賞」をその分野に優れた功績があった人に授与するから、関係団体の方々、一緒にこの賞を祝いましょう、とい

った趣旨の式典であったが、三つの点で収穫があった。一つは文学・環境学会の存在を知らない多くの環境関連の団体の方々と交流する機会があったこと、もう一つは、「環境」とは話題が外れるが、文部科学省の方とスキル中心からコンテンツ中心の英語教育の必要性について、有意義な情報交換ができたこと、最後に、今回「みどりの学術賞」を受賞した一人、東北大学大学院生命科学科教授の中静 透氏の研究が、ソローの「森林の遷移」を彷彿させる内容で、中静氏自身、ソローの作品をきちんと踏まえて評価されていたことが、本人とお話をしてわかったことである。中静氏には、文学・環境学会の存在と、この夏に日韓合同の国際シンポジウムが金沢で開かれる旨をお伝えすることもできた。

首相は訪米中で出席できなかったものの、天皇、皇后両陛下、官房長官、文部科学大臣、農林水産大臣、環境大臣、衆参両議長が出席した非常に重苦しい雰囲気の中であったが、文学・環境学会が他分野、他団体との交流を図る上で、今後も参加の意義はあると言えよう。■

ASLE-J-GRAD JOURNAL No.2

中村優子（立教大学大学院）

■子供の頃、親戚が住んでいる田舎に行った。山をあんなに間近に見たのはその時が初めてだったと思う。あまりに山が大きいので鳥肌が立つほど怖くなって、じっと見ることができなくなった。なんという体質だろうか？どうやら私は子供の頃から“自然音痴(私の勝手な造語。意味は、「自然に対する感覚がやや異常で、妙なズレがあり、よって一般的な自然の認識ができず、自然と接触したり、交感するときに支障が出る状態」とでも言おうか……)”らしい。何の因果でこうなったのか？たぶん私が“町っ子”(“都会っ子”ではない。下町育ちの子供)だからだろうか？謎は尽きないが、ま、そういう事しておこう。そんな私がネイチャー・ライティングとはこれ如何に？ズバリ、立教大の野田研一先生の授業に出席したからである。“生の自然”には手を拱いてしまう私でも、本の中なら大丈夫！と気付かされたのが先生の授業だった。どんな断崖絶壁も、蛇がウヨウヨしている洞窟も、鬱蒼とした沼地も何の苦もなく分け入って、好奇心満々で突き進めるのだ！

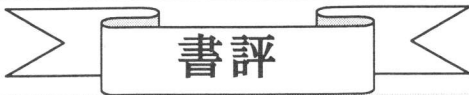
アニー・ディラード著『ティンカー・クリークのほとり』とローレン・アイズリー著『夜の国：心の森羅万象をめぐって』

の2冊を読んで気をよくした私は、ASLE-Japan について入会。昨年9月に東北大学で開催された「ASLE-Japan/文学・環境学会 仙台大会」に参加した。加藤則芳さんの特別講演「自然とアメリカアパラチアン・トレイルの旅から」を拝聴し、自然の中にダイブすることを至福と感じていらっしやる加藤さんにお会いして、生物としての性能の違いのようなものを痛感したが、と同時に自然と生きる加藤さんのような人達のお話を聞いたりして、エージェントになってもらえば、私も自然にどんどん近づけると思った。

仙台大会で「違うなあ・・・」と実感したのは加藤さんだけではない。他の先生方、いやASLE-J全体にも同様な感覚を抱いた。野田先生も本当に静寂が似合う方だが、仙台大会でお会いした先生方もほとんど皆さん、「沈黙的思考」的オーラの漂う方々だった。今までずっと広告業界で仕事をし、やれトレンドはどうの、売れ筋はどうのと、日々浮世のよしなし事で喧々囂々やって来た私にとって、それは軽いカルチャーショックで、その“静けさの余韻”は今でも残っており、思い出だけで自動的に自責の念に駆られ、人としての徳の違いのようなものをじんわりと感じる。

環境とか自然とかいうものから縁遠い世界で生きてきた私にとって、ASLE-Jの院生組織への参加は刺激であり、鍛錬であり、基礎体力づくりの部活動的存在であるが、*Ecofeminist Literary Criticism: Theory, Interpretation, Pedagogy* (1998, edited by Greta Gaard and Patrick D. Murphy: The University of Illinois Press)の第5章の翻訳は、入部に際し、よい意味でのイニシエーションとなった。環境思想も浅くしか知らなかったし、フェミニズムもアメリカの大学での学部時代に少し齧った程度だったので、それがドッキングした Ecofeminism の翻訳はまさに暗中模索という感じ。考えるたびにチョコレートを食べたせいで、やり終えた頃には随分太っていたが、達成感は一しおだった。

イニシエーション第2弾は今夏開催の日韓シンポジウムでの輪読会である。共通テキストである *Cracking the Shell* の著者3名を、山本さんが Chiha Kim、森田さんが Seungho Choi、私が Hyonjong Chong でピックアップし、読解・分析する。それに ASLE-Korea の院生がコメントを加える。同様に ASLE-Korea の院生も、日本環境文学作品を ASLE-J が選んで英訳した共通テキストから好きな作品を選んで分析をし、それに我々がコメントするという趣向だ。共に「お箸の国」で儒教の影響が強い日本と韓国だが、よく「遠くて近い」と評される。どんな発想、どんな解釈が飛び出すのか、今からワクワクする。感性が国境を越えて、文学が“文楽(ブンガク)”となる瞬間を期待している。■


 書評

書評『ロマンティック・エコロジーをめぐる』石幡直樹／佐々木郁子／結城正美／吉川朗子／小田友弥／山内正一 著（英宝社ブックレット、2006年）

松永 京子（学術振興会特別研究員）

2005年10月に山形大学で行われたイギリス・ロマン派学会第31回全国大会でのシンポジウムから生まれた本書は、ワーズワスなどに代表されるロマン主義と、近年の環境破壊や汚染に対する危機意識を反映したエコクリティシズムとの関係を、様々な角度から探り、「ロマンティック・エコロジー」の言説の重層性と多様性を明らかにしている。

この論集でキーパーソンならずキーブックとなっているのが、ジョナサン・ペイトの『ロマン派のエコロジー—ワーズワスと環境保護の伝統』（1991）である。「ロマンティック・エコロジー」や「環境詩」という概念を提唱するペイトのこの著書は、新歴史主義批評によるロマン主義の解釈を批判し、ワーズワス研究にエコロジーの観点を取り入れたことで話題となった。ペイトの研究は、ワーズワスの「環境中心主義的なまなざし」に注目し、ワーズワスを「自然詩人」として位置づけようと試みる。しかし、このことが容易でないことは本書に含まれる3つのワーズワス論によっても明らかにされている。佐々木郁子氏はワーズワスの叙事詩「廃屋」解釈において、「言語によって自然を客体化する」ために人間中心主義から逃れることのできない詩作の運命に触れ、ワーズワスは「自然を沈黙した存在」として描くことでようやく、この環境批評のジレンマとも言うべき問題に対処していると述べる。一方で小田友弥氏は、ワーズワスの湖水地方観とステイツマン社会に触れながら、ワーズワスをエコロジーに結びつけようとするあまりに引き起こしてしまう批評家達の過ちに注目する。小田氏によれば、ペイト、クローパー、マキュージックらのワーズワス解釈の偏りは「エコロジーのイデオロギー」に支配される危険性を示している。山内正一氏は、このような重層的なロマン派のエコロジー思想を理解するためには、人間と自然の関係に加えて神の関係を考慮する必要があるという重要な点を指摘し、伝統宗教否定からはじまり伝統宗教回帰へと向かうワーズワスの環境的思想を、詩人の自然観の変化によって説明する。

本書では、最新の環境批評によってロマン派詩人のエコロジーを読み直す試みも行われている。石幡直樹氏は、キーツの詩における「死」の概念に注目し、「生」と同様「死」が生態系の一部であるという認識がキーツの詩に埋め込まれていることを明らかにし、キーツの自然を「フェティッシュ」や「現実逃避」として退けてきた既存の批評を覆すことに成功している。また、吉川朗子氏はクレアとワーズワスのエコロジーとを比較し、人間も含めた生物の網の目の共同体をその基盤としているクレアのエコロジー思想に意義を見いだしている。

ロマン主義と現代環境批評—この二つが相克する地点に「ポスト・ロマン主義」が表出することを明らかにしてみせてくれるのが、結城正美氏の論文であろう。結城氏は、日米英のエコクリティシズムの類似と相似に言及しながら、言語と自然が相互関係にあるとする考え方もエコクリティシズムの基本的姿勢の一つであると述べる。エコクリティシズムの批評実践は「批評する私たち自身の言語世界ならびに思惟様式を不断に問う反体系的・反方法主義的なものでなければならないのではないか」という結城氏の問いは意義深い。私自身も環境文学を論じる際、自分の用いる言語と実際に言語表象される環境との深い関係をつい見過ごしがちである。自己反省とともに、「ロマンティック・エコロジー」のこれからの行方を見守ってゆきたい。

ミネルヴァ書房『英語文学事典』偶感

太田雅孝(大東文化大学)

■ニューズレターの編集者から書評を依頼されたのだが、別に優れた書評が出ると思われることと、私自身が、微力とはいえ、この事典の編集に一部関わった者ということもあって、ここでは一冊の書物として姿を現した『英語文学事典』への、手

前味噌を承知の上での感想としてこれを書くことを許していただきたい。

本書は、英語で書かれたく文学>を対象としているので、英米の従来から評価のある作家や作品はもとより、英米以外の国々の重要な作家たちも視野の中に取り入れられている。この越境性は、ジャンルにも現れていて、従来の小説中心になりがちな編集に風穴を開けて、児童文学や批評、さらには自然・環境を扱ったものからジョン・レノンに至るような多様性を獲得している。もっと言えば、必ずしも評価の安定した作家ばかりでなく、多くの新しい才能にもページが割かれている。また、必ずしもかつてと同じような評価を繰り返すのではなく、最近の研究をふまえた見方が紹介されているものも少なくない。

そうした許容性の高い態度は、「まえがき」に述べられているような、現在のく文学>が置かれた多文化的状況、それに対する様々な認識枠の変容と呼応しているもので、それをく文学>に親しみ始めた学生や一般読者にも分かりやすい言葉遣いで語るだけでも本書の特色とできるのだが、さらに本書が付け加えた面白さを一つ挙げれば、「エピソード」と題された項目が置かれたことであろう。たとえば、ジェラード・マンリー・ホプキンスのところでは、く何千枚もの試験答案のひとつひとつに2分の1点とか4分の1点などを与え厳密に採点していたため、成績提出の間際になっても、頭に濡れたタオルを巻きながら1点の微妙な価値に煩悶していた。>と書かれている。思わずのけぞってしまうほど面白い話だが、几帳面なホプキンスらしい逸話として、これに勝るものはないように思えてくるから、じつに絶妙である。

良いことばかりが目立つので仕方がないのだが、これではあまりに最良すぎと思われるので、自戒を込めて、こつそりと痛いところも書いておけば、編集上の統一の不備や執筆者の文章を手直したときの脱字などが残っていたりもする。幾度となくかなり文章に気を付けたつもりだが、瑕瑾が残ったことは極めて残念であった。反省とともにお詫びしたい。と同時に、二段組み800頁に及ぶ編集としては、許容範囲に考えてもらえないかと弁護したくなる気持ちもなくはない。さらに、ようやく全体が見えてきて初めて気付いたこととして、もっと取り上げていても良かった人物たちがいることである。たとえば、新しいところではジュディス・バトラーやリンダ・ハッチオン、やや古いところではマージョリー・ホープ・ニコルソン、さらに古いところではサミュエル・ダニエルなどなど。しかし、これも事典とはいえ、執筆から編集にかかった時間や、出版できる頁数などによる取捨選択の制約があり、思うようにはいかなかったのである。

しかし、これらの反省点は、これからこの事典が世間の厳しいご指摘を受けながら育っていく中で、きっとより良いかたちで改訂されていくはずである。従来の固定化され硬直化したく文学>ではなく、新しい認識で捉えられたダイナミックなく文学>に対する新たな意欲をかき立て、多様な読者へのサービスを考えた事典として、本書が新時代にふさわしい新鮮さを保ちながら、多くの方々の座右に置かれることを祈りたいと思う。■

『アメリカ研究』41 特集：自然と環境

浅井千晶(千里金蘭大学)

■アメリカ学会の『アメリカ研究』41号の特集「自然と環境」には、ASLE-Japan の前代表の山里勝己氏を始め、伊藤詔子、波戸岡景太、松永京子の会員諸氏の論考が掲載されている。また、及川敬貴氏による環境行政論、小塩和人氏による水の価値の市場・文化・生態系的研究、河合正朝氏による環境彫刻とイサム・ノグチ論も掲載され、充実した特集となっている。

山里勝己氏の論考「読み直される「アメリカ」の場所—生態地域主義とポストコロニアリズム」は、生態地域主義の丁寧な説明から始まり、「生態地域主義はポストコロニアルな要素を内包しつつ、場所の読み直しを試みる思想」であり、新たなアメリカ像の構築を指向する運動であると論じる。というのも、「アメリカ」がヨーロッパからの植民者による場所の占有と名称の書換え行為によって成立した以上、人間の日常性を示唆する「場所」(プレイス)に根ざす生態地域主義者にとって、土地の来歴、先住民が生きた歴史とその文化の痕跡を知ることは、自らのアイデンティティを知る行為であるからだ。現代アメリカで「場所」とアイデンティティに覚醒する人間はコロニアルな意識とは無縁ではありえないことが、山里氏のご専門とする Gary Snyder と Wendell Berry の詩やエッセイの分析により、明瞭に提示されている。

伊藤詔子氏の「*Silent Spring* —Toxic Inferno を下って沈黙のジェンダー的ルーツを探る」では、まずタイトルの変遷の意味が解明される。冷戦時代の危機感を反映した二項対立的な“The War against Nature”というタイトルから“*Silent Spring*”

に変遷したのは、ヨーロッパの魔術と毒の伝統を内包し、＜自然の賞賛＞とその喪失を嘆く＜エレミヤ的悲嘆＞という説教文学的構造により読者を説得する戦略的選択であるとする。*Silent Spring* はS音が繰り返され耳馴染みのよい詩的なタイトルというだけではなかったのだ。一方、『沈黙の春』は、自然を制御し悪行を働く人間は男性("man")とされ、女性科学者である語り手や地球・生物全体と対比される二元論に基づくが、このジェンダー的ルーツを、伊藤氏はソローの先駆的ともいえる女性論一女性的なるものの本質を自然と同質的な自由とし、その自由は男性と社会制度からの自由でもある一にみる。さらに、カーソンが先鞭をつけた環境的アポカリプスと癌表象のフレームを継承する女性環境作家 Sandra Steingraber や Terry T. Williams のレトリックが論じられ、『沈黙の春』が西洋の「毒の言説」の伝統において重要な位置を占めることを改めて認識させられた。

波戸岡景太氏の「動物たちの困惑—トマス・ピンチョンのポストモダン・エコロジー」は、ピンチョンの後期作品にみられる動物と人間との関係の表象が、人間中心主義を否定しながらも、同時に人間たちを動物たちの「所有者」あるいは「マスター」として肯定的に捉えようとするものであると論じる刺激的な論考である。波戸岡氏はダナ・ハラウェイの生物と機械の境界を攪乱する「サイボーグ宣言」(1985)から「犬」のような異なる種と人間とのあるべき関係を模索する『コンパニオン・シーズ宣言』(2004)への時代を背景とする変遷と、ピンチョンの作品世界の変化を平行に捉える。ピンチョンの『ヴァインランド』(1990)における男ゾイドとその犬デズモンドとの関係は、人間と動物の双方向から生み出される「関係」を表象し、『メイソン&ディクソン』(1997)のビーバー男に困惑する動物たちの例では、人間と家畜と野生動物の関係が転倒すると波戸岡氏は述べる。さらにユナボム事件という環境ラダイズムとピンチョン作品との関連を紐解き、その背後に60年代の対抗文化の圧倒的影響を確認する。

松永京子氏の「カルチャーとビジネスの狭間で—デイヴィッド・マス・マストとルース・L. オゼキの作品を中心に」は、今日の環境論の基礎にある多様性思想と環境正義における文化多元主義的視点の接点を二人の日系アメリカ人作家のテキストに見出そうとする意欲的な論文である。ドキュメンタリー制作者としても知られるオゼキの小説第二作『オール・オーバー・クリエーション』では、遺伝子工学と環境汚染、農業危機が前景化されている。オゼキはソロー以降の環境作家の抵抗の歴史を継承しているが、その抵抗の様式が、主要な登場人物であるフラワー氏の妻モモコが扱う種子の多様性が基軸である点が新しい。マストは化学薬品の使用を極力避け、自然の自生力に基づく「自然農業」の実践過程を『桃の墓碑銘』に記している。マストが実践するオーガニック農業が矛盾と問題を孕んでいるにせよ、彼はエコロジカルな農業と伝統的日系農業を融合することで、多様な文化やエスニシティを受容できるコミュニティ中心の農業を確立することに希望を見出すと松永氏は述べる。このように、二人の日系アメリカ人作家が、エコロジカルな多様性と文化的多様性を結びつけた新しい環境的視点を提示する作家として位置付けられたとき、目を開かれる思いがした。

アメリカ環境文学や環境思想に新たな概念や視点が導入され、打ち立てられつつあることを感じた特集であった。■

Coming into Contact: Explorations in Ecocritical Theory and Practice. Ed. Annie Merrill Ingram, Ian Marshall, Daniel Philippon, and Adam W. Sweeting. Athens: U. of Georgia Press, 2007.

ブルース・アレン(順天堂大学)

相原優子 訳 (武蔵野美術大学)

■「現在、活発に実践されているエコクリティシズムの一端を紹介する *Coming into Contact* は、未発表論文16編から成る論文集であり、「文学と環境」研究に於いて最も有望とみなされる新しい潮流の幾つかを詳しく分析している。収録されている論文は、沼地、捕虜収容所、アジア系アメリカ人を巡る環境、都市化された北東部、そしてリンチ現場など、環境と文学との関係に於いて今まで全く扱われることのなかった、あるいは十分に分析されることのなかった側面を詳しく検討している。著者達は、環境文学のディスコースを、破壊された風景の修復、作文の授業時に展開されるグリーン・デザイン教育、環境保護活動家達による説得力のある戦略、都市建築の実践、そして人間の作り出したテクノロジーの及ぼす自然への影響等のテーマに取り組む際に、応用できるものとして示唆する。

また、これらの論文は、今まで以上に、エコクリティシズムを、自然科学、特に進化生物学、生物分類学、そして地質学などと結びつける。著者達は、エコクリティシズムの理論と実践の両面に携わりながら、エコクリティシズムを、それに関わる幅

広い分野のテキスト、ディスコース、そして文化的実践だけでなく、物理的環境とも緊密に関係付ける。」(バックカバーからの引用)

この論文集には、ブルース・アレンの論文“Facing the True Costs of Living: Arundhati Roy and Ishimure Michiko on Dams and Writing”も収録されている。この論文は、この二人のアジア女性作家の執筆活動、アクティビズム、理想を、特に、ダム建設が及ぼす地元の伝統文化と環境への影響と、現在も続いている環境破壊をくい止める手だてとしての文学の可能性を巡る彼女たちの関心に注目しつつ比較検討している。■

「日韓合同シンポジウム講師紹介」

来る8月19日より21日まで金沢市内で開催される「日韓合同シンポジウム」に向けて、実行委員会を中心として着々と準備が進められている。それにちなんで、「会員諸氏が何をさておいても金沢に足を運びたいくなるように」との注文をつけさせていただいて、招聘講師お三方を紹介して下さるよう依頼した。(編集部)

いのちの思想家、森崎和江

結城正美(金沢大学)

■ 沖縄で2003年に開かれたASLE国際シンポジウムが、森崎和江さんの「ASLE-Japan デビュー」でした。シンポジウムで講師をつとめられ、それを機にASLE-Japanに入会されたばかりか、シンポ当日の様子を『いのちへの旅—韓国・沖縄・宗像』(2004年)で綴ってもおられます。沖縄で語られた、〈産〉の思想にもとづく新たな言説の可能性は、森崎さんが一貫して探究なさっているテーマといってよいでしょう。「人は生まれて死ぬ」という見方に「産む」というスタンス(無論、生理学的な意味に限定されません)を組み込み、「生まれて、産んで、

そして死ぬという生命連鎖」(『いのち、響きあう』)を含んだ生命観の思想化に取り組んでいらっしゃいます。

森崎さんには、エッセイ、聞き書き、詩を中心に、数多くの作品があります。世代によっては、谷川雁らと文芸誌『サークル村』(1958-60年)を発行した書き手として、あるいは、女性の内発性に分け入る女性交流誌『無名通信』(1959-61年)の編集者として、森崎さんをご存知の向きもあるでしょう。『第三の性』(1965年)や『闘いとエロス』(1970年)をはじめとする初期の作品には、社会制度や規範を越えた、エロスの次元での人間観を求める、森崎さんの思想的格闘の軌跡が鮮烈です。一方、『いのち、響きあう』(1998年)や『北上幻想』(2001年)など比較的最近の作品は、格闘を経て到達した祈りのことばに満ちているように思えます。

お生まれは朝鮮です。今年80歳になられました。人生の最初の17年間を朝鮮で過ごされたそうです(朝鮮での生活や経験は『慶州は母の呼び声』(1984/2007年)で語られています)。その後、福岡県立女子専門学校(現・福岡県立女子大学)へ「留学」なされ、以後、福岡にお住まいです。ただし、根を下ろしているというわけではないようです。森崎さんは常に旅をしておられ、二人のお子さんが小さいときも近所の女性たちの助けをかりて、日本各地へと旅に出ておられたとのこと。旅人としての書き手—ここに朝鮮と日本のあいだを彷徨する森崎さんの思想的スタンスが表れていると思います。

森崎さんの作品と思想は、ポストコロニアルな時代における新たな地域研究の思想的準拠枠として、また、従来のジェンダーを越えたエロスの生／性の言説への水先案内人として、国内外でますます注目されています。スピヴァク思想とお孫さんの話があたかも同じトピックであるかのように、さりげなく語られる森崎さんの思想的母体の奥行きは、計り知れません。

■ 吉増剛造氏との対話集『「アジア」の渚で』(藤原書店、2005)に引き続き、今年に入り『高銀詩選集 いま、君に詩が来たのか』(藤原書店、2007)が出版された。これまでに翻訳された高銀氏の詩集は1980年代に書かれた『祖国の星』(新

亡霊のような希望：高銀氏来日によせて

小谷一明 (県立新潟女子短期大学)

幹社、1989)だけであったため、『高銀詩選集』により半世紀を越える詩業が、ごく一部ではあるが紹介されることになった。そのなかの「アレン・ギンズバーグ」という詩では、高銀氏が1988年夏、ソウルでギンズバーグから、ゲーリー・スナイダーに会いなさいと言われた経緯が紹介される。1997年11月、高銀氏がパークレーでスナイダーに会ったとき、ギンズバーグがスナイダーにたいしても高銀に会いなさいと言っていたことを知る。二人は亡くなったギンズバーグに引き合わされていた。二人はギンズバーグの古いアコーディオンの音に合わせ、それぞれ韓国語と英語で、つまり三人で詩を朗誦する。2007年夏、金沢の大乗寺で二人が同じ舞台上で朗誦することになった。二人の詩人を引き合わせる、そして二人がともに再生する死(詩)が誰(何)になるのか、今から期待に胸がふくらんでしまう。

ここで『高銀詩選集』から1960年と2000年に発表された二つの詩を紹介したい。

「歌」

歌え

きのうの歌は 今日死だ

歌え

今日の歌は 明日だ

歌には どんな歌にも

革命が入っている 歌え

『彼岸感性』(1960年)

「今日の死」がきのうの歌であることは、今日にきのうの歌が届いていないことになる。そのなかで「明日」が呼び出され、歌い続けることが要請されている。『高銀詩選集』に所収された「詩は誰なのか」では、詩が「引火性の低い物質」であってはならないという自戒が語られている。詩は、傍らに生まれた詩と共鳴し合う「合唱の文学」となる理想の文学であった。つまり「詩人は誰なのか」ではなく、「詩は誰なのか」という詩の漂着する彼岸に視線が据えられている。

この合唱は『「アジア」の渚で』で語られる「地球的目覚め」と結びつき、呼びかけが天空や惑星に向けられる。『高銀詩選集』にある2000年の詩「休戦線」の後半部では、朝鮮半島を分断する38度線が次のように歌われる。

木々

動物たち 小さい生き物 細菌たち

君たちのためにどうか永遠なれ

休戦線

こちら側もあちら側も広げて行きなさい

休戦線

東北アジアの亡霊のような希望よ ここに來い

広げて行きなさい

広げて行きなさい

『南と北』(2000年)

動物だけではなく休戦線にも呼びかける詩に、場所や時間の領有に拘泥する人間という言葉は現れない。この呼びかけに漏れた人間という言葉の再生が、期待されているように感じられる。■

■現代アメリカで詩を書く者は朗読会でデビューする。1955年、ゲーリー・スナイダー、アレン・ギンズバーグ、そしてジャック・ケルアックらが参加したサンフランシスコのシックス・ギャラリーでの朗読会あたりから、このようなことが慣例になったというのが定説である。55年のシックス・ギャラリーに集まった詩人たちを「サンフランシスコ・ルネサンスの詩人たち」と呼ぶときもあるが、詩を朗読するという現代アメリカ文化を創り出したのはまさに彼らであった。

彼らが始めた詩の朗読会は、瞬く間にアメリカ西海岸に広がっていった。それは、耳で聞いて楽しめる詩が書かれるようになったことを意味した。難解なモダニズムの詩など、吹っ飛ばしてしまったのである。だから、モダニズム以降のアメリカ詩の期待を一身に担っていた感のあるロバート・ローウェルは、シックス・ギャラリー朗読会から2年後の1957年、アメリカ西海岸にやってきて詩の朗読をしたのであるが、サンフランシスコ・ルネサンス詩人たちの快活な詩風に接してきた聴衆の反応を見た後では、彼自身の詩は「よそよそしく、シンボルにがんじがらめになっていて、強情なまでに難解な詩」と告白せざるを得なかった。ローウェルの詩人としてのターニング・ポイントになった。

詩は聴衆を持ち得ない、詩がポピュラーであること(大衆的であること)は恥ずべきことだと考える風潮が、50年代前半までのアメリカにはたしかにあった。エリオットも、フロストも、聴衆を前に詩を朗読した。しかし、録音されたその声はぼそぼそとした憂鬱そうな声で、こんなことはいやいやでしかたがない、きみたちに頼まれたからやっているにすぎない、という感じがついてまわるのである。はっきり言って、かれらの朗読は聞いていておもしろくないし、楽しくもない。

だから、そのような風潮を打ち破り、朗読会をポピュラーなものにし(多くの聴衆を獲得し)、詩人の肉声を伝えようとする若い詩人たちの登場は、詩人は大衆から疎外され孤立した存在であると考えた、モダニストたちの時代が遠ざかりつつあることを意味した。

スナイダーは、このようなアメリカ現代詩の世界を創造することに力をつき、詩の朗読会の楽しさを教えてきた詩人のひとりである。1980年、わたしはカルフォルニア大学ではじめてスナイダーの詩の朗読会に行ったのであるが、それ以来27年、大げさに言えば、わたしはその朗読会の追っかけをやってきたような気がする。サンフランシスコで、ロサンゼルスで、パリで、東京で、台湾で、沖縄で、わたしはスナイダーが朗読会でいろいろな実験をするのを見てきた。たとえば、あるひとつのテーマで朗読する詩を選んだり、刊行したばかりの詩集を中心に詩を読んだり、あるいは聴衆のリクエストにこたえるかたちで作品を読んだり、あるいはまだ練り上げている最中の詩を朗読してみたりと、詩人はいろいろなことをした。

詩人は印刷されたテキストに臨機応変に言葉を挿入したり、ときには歌い出したりすることもあった。これはスナイダーにとって、現代詩が口承文学に近いものであること、したがって詩のパフォーマンスはいつでもそのときどきの詩人の即興的な言葉の創造に開かれていることを意味する。詩のテキストに「ファイナル」なものはなく、詩人の白熱する想像力は朗読しながら瞬時に言葉を別の音に変換していくのである。

大乘寺での朗読会は高銀とスナイダーという、太平洋の西海岸と東海岸を代表する詩人の共演となる。こんどはどのような朗読会になるのであろうか。想像するだけでワクワク、ゾクゾクとしてくるのである。■

ゲーリー・スナイダーと詩の朗読会

山里勝己(琉球大学)

エコクリティシズム研究会2006～2007の報告

1. 2007年度の研究会について

日時:2007年8月11日(土) 9:30-17:00(懇親会 17:30-20:00)

会場: 広島国際学院大学立町キャンパス

(広島駅より市内電車で、八丁堀の次の立町で下車、電停前)

広島県広島市中区基町13-7 <http://www.hkg.ac.jp/html/>

課題図書とリーダー:①White Noise, Don DeLillo 大島由起子(福岡大学)

② *All Over Creation*, Ruth Ozeki 松永京子(学振特別研究員)

③ *Tropic of Orange*, Karen Tei Yamashita 吉田美津(松山大学)

参加問い合わせ先: 真野 剛 gomano@hiroshima-u.ac.jp

2. 研究会プロジェクトの出版について

1) Lawrence Buell, *The Future of Environmental Criticism* (Blackwell, 2005)の翻訳、2007年6月鶴見書店より刊行。翻訳作業は長期間、難航を極めたが、研究会5人の共同作業により本文以外に、環境批評用語グlossary、書誌邦訳情報、批評用語の本文中訳注、後注、原書にない語も含めた索引つき。重要基本書の一つの刊行となります。(科学研究費による研究課題「文学批評理論としてのエコクリティシズム確立に向けての研究」[課題番号17520171]の成果の一環でもある)。読者の皆様の暖かいご教示とご意見を宜しく願います。

2) エコクリティシズム論文集『日米フォーラム—エコトピアと環境正義の文学』晃洋書房より、今夏刊行。研究会の17人の論文他、編者スコット・スロヴィック、および氏推薦の最先端のエコクリティック5人(巽孝之、ジム・ターター、レベッカ・ソールニット、リー・ロゼール、セント・アーランド)の参加を得て、4部構成、22の章にわたり、ユートピア、ディストピア、エコトピアおよび環境正義について日米から縦横に論じたもの。スロヴィックのあとがき、詳細な「ユートピア、エコトピア、環境正義」参考文献解説付き目録付き。目次詳細は以下の研究会URL「目次」をクリックしてください。(文責・伊藤詔子)

<http://ha2.seikyoku.ne.jp/home/huckleberry/ecoc.htm>

◎事務局より◎

ASLE-Japan/文学・環境学会 第13回全国大会

とき: 2007年8月19日(日)

ところ: 金沢市文化ホール(石川県金沢市高岡町15-1 電話076-223-1221)

9:15-10:15

役員会

10:20-11:20

研究発表

村松直子(青山学院大学・院)「V.ウルフの東洋的自然観および世界観—短編『蛾の死』を中心に」

高野忍(京都大学・院)「Notgeld から義理小切手へ:トマス・ピンチョンの小説の代用通貨を通して

考える、産業社会の持続可能性」

11:30-12:00

総会

ASLE 日韓合同シンポジウム

場所、自然、言葉—日韓環境文学の〈いま〉を考える

ASLE Japan-Korea Joint Symposium

Place, Nature, and Language: Thinking about "Now" in Japanese and Korean Environmental Literature

とき: 2007年8月19日~21日

19-21 August 2007

ところ: 金沢市文化ホール(石川県金沢市高岡町15-1 Tel. 076-223-1221)

Kanazawa Bunka Hall (15-1 Takaoka Kanazawa, Ishikawa)

大乗寺(石川県金沢市長坂町ル10 Tel. 076-241-2680) Daijōji (ru 10 Nagasaka Kanazawa, Ishikawa)

主催: ASLE-Japan/文学・環境学会、ASLE-Korea

特別支援: ロレックス インスティテュート

後援: (財)トヨタ財団、独立行政法人日本万国博覧会記念機構、日韓文化交流基金

Organizers: ASLE-Japan, ASLE-Korea

Special Supporter: The Rolex Institute

Sponsors: The Toyota Foundation, the Commemorative Organization for the Japan World Exposition ('70), the Japan-Korea Cultural Foundation

プログラム PROGRAM

8月19日(日)金沢市文化ホール Sunday, August 19/Kanazawa Bunka Hall

- 13:00-14:00 受付 Registration
 14:00-14:15 開会の辞 Welcome
 14:15-15:30 森崎和江氏 講演&朗読「いのち響きあう世紀へ」 Keynote Speech and Reading by Morisaki Kazue: "Towards a Century of Reverberating Life"
 15:30-15:50 休憩 Break
 15:50-17:20 Session 1「日韓環境文学における自然の詩学」Poetics of Nature in Korean and Japanese Literature
 河野千絵(日本大学非常勤)「築地正子の短歌一個の自然・孤の自然」
 Huh Hyejung, Korea Cyber University (Korea), "The Arabian Nights, the Silk Road, and the Erotic Motif in 'Cheoyongga'"
 Hong Yong hee, Kyunghee Cyber University (Korea), "On Ecological Imagination of Kim Ji Ha's Poetry"
 森田系太郎(立教大学・院)「クイア・エコフェミニストでエコポエト?—詩人・伊藤比呂美を読み直す」
- 17:20-18:50 ドリンク&スナック Drinks & Snacks
 18:50-20:40 読書会 Reading Workshop
 Discussion Leaders: Gangsun Lee, Yeonhuen Kang, Sun Young Kang (ASLE-Korea), 森田系太郎, 中村優子, 山本洋平(ASLE-Japan)

8月20日(月)金沢市文化ホール Monday, August 20/Kanazawa Bunka Hall

- 10:00-10:50 高銀氏 講演 Keynote Speech by Ko Un: "A Poor Reflection"
 10:50-11:00 休憩 Break
 11:00-12:30 Session 2「場所の感覚」Senses of Place
 小谷一明(県立新潟女子短期大学)「向かい風と返し風—在日歌人李正子の「風」を読む」
 Kang Yong-ki, Chonnam National University (Korea), "Eco-consciousness in *Poongsoo*"
 Kim Ilgu, Hannam University (Korea), "A Comparative Ecological Study of *The Water Babies*, *Sim Cheong*, and *Princess Bari*"
 Lee So-Young, Essex University (UK), "Practical Ecotopia in Korea"
- 12:30-13:30 昼食 Lunch
- 13:30-15:00 Session 3「近代化と日韓の環境言説」Modernism and Environmental Discourses in Korea and Japan
 Simon Estok, Sungkyunkwan University (Korea), "Diethylstilbestrol, *My Year of Meats*, ecocriticism, and nation"
 寺下浩徳(立命館大学・院)「二人の女性、二つの海—石牟礼道子『苦海浄土』と李男熙(イ・ナミ)『海からの長い別れを』をとおして」
 中村優子(立教大学・院)「デカダンの描くファンタジーにおける自然と人間—坂口安吾の「桜の森の満開の下」と李箱の「黄牛と鬼」の比較を通して」
 Ursula K. Heise, Stanford University (USA), "From Robot Pastoral to theme Park Idyll: Environmentalism, Modernization and Postmodernization in the Films of Hayao Miyazaki and Isao Takahata"
- 15:20-15:40 珈琲ぶれいぐ Coffee Break
 15:40-17:00 Session 4「文学と環境の行方—東アジアからの提言」The Future of Literary Environmentalism: Proposals from East Asia
 中垣恒太郎(常磐大学)「公害怪獣とエコクリティシズム—ポスト工業化社会における核・ジャンク・廃墟の想像力」
 結城正美(金沢大学)「庶民の文化と新たな環境言説—石牟礼道子と森崎和江のことばの母層」
 Lee Mansik, Kyungwon University (Korea), "Deeper Ecology Movement: Deep Ecology Movement Remodeled by Deconstruction Apprehended by an Oriental Mind-set"
 Wu Chan Je, Sokang University (Korea), "Harmony of Tree and Bird: Ecological Imagination of Novels of Yi Chong-Jun"
- 18:15- 夕食会 Dinner

- 8月21日(火) 金沢市文化ホール、大乘寺 Tuesday, August 21/Kanazawa Bunka Hall and Daijōji
- 9:00-12:00 Session 5「ゲーリー・スナイダー in アジア」Gary Snyder in Asia
 岩政伸治(白百合女子大学)『無の場所』から読み解く賢治とスナイダー」
 Kim Won-Chung, Sungkyunkwan University (Korea), “Gary Snyder Studies in Korea”
 Robin Chen-Hsing Tsai, Tamkang University (Taiwan), “Gary Snyder and the Literature of Energy”
 山里勝己(琉球大学)「惑星の未来を幻視するために—ゲーリー・スナイダーと
 日本、1951-2006」
 Commentators: Gary Snyder, 加藤幸子, 管啓次郎
- 12:00-13:30 昼食 Lunch
- 13:30-15:00 Roundtable Session「さらなる連携を求めて」From Now: Furthering East Asian Collaboration
 Shin Moonsu, Seoul National University (ASLE-K 第3代代表)
 Lee Soongwon, Seoul Women's University (ASLE-Korea代表)
 乳井昌史(エッセイスト、東京農業大学客員教授)
 生田省悟(金沢大学)
- 15:00-15:15 閉会の辞 Closing Address
- 17:00-19:00 ゲーリー・スナイダー氏 & 高銀氏 ポエトリーリーディング in 大乘寺
 Poetry Reading by Ko Un and Gary Snyder in Daijōji

シンポジウムでは、初日の読書会と最終日のポエトリーリーディング in 大乘寺をのぞき、基本的に同時通訳(日本語、朝鮮語、英語)が付きまます。

◆ASLE 日韓合同シンポジウム 参加登録手続きのご案内

ステップ1. 参加申込書の記入

「ASLE 日韓合同シンポジウム参加申込書」に必要事項をご記入ください。

ステップ2. 参加費の振込

以下の郵便振替口座に、参加費 10,000 円(部分払いの場合は、予稿集 3,000 円、昼食・夕食会費 6,000 円、会場移動費 1,000 円)、講演&朗読会 DVD をご希望の方はそれに 6,000 円を加えて、7/12(木)までにお振替下さい。

お振替の際は、通信欄などに「日韓合同シンポジウム参加費」と明記し、部分払いの場合は「何のための何円」かを記して下さい(「会場移動費 1,000 円」など)。

また ATM 等を使用して口座間振替をされる際に、参加される方の名前と振替元口座名義が異なる場合、混乱が生じないように「参加者名」を通信欄などに記して下さい。

今回使用する口座には他の目的のためのお金も入りますので、以上のお願いを守って下さらない場合、大会当日に「本人確認」ができない可能性もあります。何卒上記の件をお守り下さるようよろしくお願いいたします。

口座記号番号:01300-0-93821

加入者名:文学環境学会

お振替の際に、「会費」と同時に「参加費」を入金しないで下さい!
 お手数ですが、「会費」と「参加費」は別々をお願いいたします。

ステップ3. 参加申込書の送付

参加申込書を郵送またはファックスで事務局までお送りください。7月13日(金)必着です。

以上で参加登録手続き終了です。

今回のシンポジウムには、ASLE-Korea から 20 名、ほかにアメリカや台湾からも参加があります。日韓を中心に東アジアの環境文学研究について考える絶好の機会です。ふるってご参加ください。

なお、参加登録者には、7月下旬に、予稿集をはじめとする資料をお送りします。あらかじめすべての発表原稿をお読みください。シンポジウム当日は、原稿を読むのではなく、発表テーマをふくらませるかたちで議論したいと考えております。

また、読書会のテキストは、*Cracking the Shell: Three Korean Eco-poets* (Homa & Sekey Books, 2006)と *Japanese Environmental Literature: Selected Works for Reading Workshop ASLE Japan-Korea Joint Symposium* です。後者は申込なさった方にお送りします。前者の *Cracking the Shell* につきましては、各自でご用意ください。

森崎氏講演&朗読、高銀氏講演、スナイダー氏&高銀氏のポエトリーリーディング in 大乘寺を録画し、重要な記録としてDVD化します。ご希望の方は、「ASLE 日韓合同シンポジウム参加申込書」の該当欄をチェックし、必要事項をご記入の上お送りいただくとともに、実費 6,000 円を上記口座にお振替ください。シンポジウム終了後1~2ヶ月後にお送りします。

◆会場までのアクセス

JR 金沢駅よりタクシー10分、バス15分、「南町」下車徒歩3分

小松空港より空港バス利用約40分、「香林坊」下車徒歩10分

◆宿泊について

宿泊の手配は、参加者各自でお願いします。会場(金沢市文化ホール)周辺には宿泊施設が多数あります。以下のリストはその一部です。

ホテル名	シングル料金(目安)	会場から	電話
金沢ニューグランドホテル	8,500円～	徒歩0分	076-233-1311
金沢ニューグランドホテルアネックス	8,500円～	徒歩0分	076-233-7000
私学共済金沢宿泊所兼六荘	5,500円～	徒歩10分	076-232-1239
金沢東急ホテル(「香林坊」バス停前)	12,500円～	徒歩10分	076-231-2411
金沢スカイホテル(「武蔵が辻」バス停前)	6,000円～	徒歩10分	076-223-2233

【編集後記】

ニューズレター22号をお届けする。まず、5月中旬に開催された役員会での議を経る必要があったため、発行が例年より一月ばかり遅れたことをお詫びしたい。とはいえ、8月に予定されている「日韓合同シンポジウム」に向けて雰囲気盛り上げたい、との編集部のねらいは叶えられたように思うし、同時に、随想、連載のコラム、研究会の報告、書評と盛りだくさんの内容になったと自負している。とりわけ、今回は「随想」の欄に力を入れるとともに「書誌情報」を「書評」に格上げして、紙面のいっそうの充実を試みた。

なお、生田代表からの貴重な情報によると、野田・結城編『越境するトポス』(彩流社、2004年)所収の同氏の論文「覚醒する(場所の感覚)」が、2007年度文教大学の「国語」の入試問題として出題されたとのよし。同氏の「解けそうにない問題でした」、「売り上げにささやかな貢献をしたのかどうかは分かりません」という感想とともに紹介しておきたい。いずれにせよ、特筆大書すべき「事件」と言うべきであろう。

今回も編集部より何かと厚かましいお願いをしたが、会員諸氏のご協力を得て、何とか発行にまでこぎ着けた。この場をお借りして、ご投稿下さったみなさま、玉稿のお願いに快く応じて下さった方々に篤く御礼申し上げたい。

旧盆を過ぎた金沢といえば、昼はまだ炎暑でも、朝夕はめっきり過ごしやすく、夜ともなれば、盆踊りのお囃子がどこからか風に乗って聞こえてくる(はずだ)。夏の終わりの金沢でみなさまと再会できる日を楽しみに。(K・M)

【発行】

ASLE-Japan/文学環境学会
代表 生田省悟
事務局：金沢大学外国語教育研究センター
結城研究室内
〒920-1192 金沢市角間町
Tel: 076-264-5819, Fax: 076-264-5993
E-mail: yuki@ge.kanazawa-u.ac.jp

【編集】

編集代表 村上清敏
〒920-1192 金沢市角間町
金沢大学文学部(総合教育棟)
Tel: 076-264-5827
Fax: 076-234-4170
E-mail: melville@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

